人扱いする三井許せぬ

村上さんと奥さんが語る11・9への怒り

村上重一郎さんは、今年38才。宮浦鉱の採炭工だから、元気でさえあれば第４次合理化反対のため転場でバリバリ闘っているはず。ところが現在はＣＯ中毒患者として、奥さんにつき添われながら療養をつづけている。一昨年の11月に、みんなが労災補償を打ち切られたとき「一時経過を観察する」と労災補償をつづけられてきてはいるものの、いつ打ち切られぬともわからず、不安につつまれている。宮前社宅の自宅には奥さんの久美子さん（35才）、長女の一恵さん（中学１年）、次女潤子さん（小学４年）、三女のヒロミさん（幼稚園）がすんでいる。村上さんは今年の７月退院して以来、自宅から大地評曙病院に毎日通院しているが、往きも帰りも奥さんがつきそつては村上さんのワキをかかえて歩かなければならない。ここに紹介するのは、その村上さんと奥さんが語る11・９三池大変災への怒りである。

ＣＯ闘争の中から　第12回

ＣＯ闘争に集まる連帯の手

この一日からいよいよ、ＣＯ闘争のための資金獲得をめざす、組合の物資あっせんの事業がスタートした。

外部からもこのＣＯ闘争へ支援の手が差し伸べられ、炭労大会が組合員一人当り五百円カンパを、また総評大会が組合員一人当り二十円を出し合うことを決定したほか、名古屋市森山区でも少人数（七人）ながら、ＣＯ患者を守る会が誕生。

沼田稲次郎教授ら個人的にＣＯ患者・遺族を守る会に加盟を申しこまれた人十四人。カンパもひきつづき寄せられ、浅野幸夫さん（どんな人かよく知られていないが）のように、中には一人で五千円もたくされた人さえある。中でも熊大病院入院患者のみなさんが苦しいフトコロの中から五百円カンパしてきてくれたことには、感謝がつきない。

一一・九＝五周年を機に、覚悟を新たにしてＣＯ闘争を強めるためがんばろう。

素面で救出に突込む

「ガスはないですか？」と重装備の救護隊

悪い予感

昭和三十八年十一月九日村上さんは三番方出勤であった。午後三時すぎ貨物の途中で地底からつき上げてくるような大爆音をきいた妻の久美子さんは、なにかハッとする不吉なものを感じていた。それは三川鉱で同じ炭鉱労仂者として仂いていた（そして同じ爆発でＣＯ患者になされた）お父さんの帰りを、いつも心配しながら待っていたお母さんの気性をそのままうけついでいたからだろうか。

三川鉱から遠くはなれた宮浦鉱の勝立社宅では爆発の惨状を知るよしもなかった。夕方目をさました重一郎さんは時間ごとに欠かさなかったテレビのニュースも見ることをわすれ、「出勤するから弁当をつめてくれ」といい出した。三番目の子どもが生まれ、また十六のときから宮浦鉱に下がって弟たちを養ってきた重一郎さんには、労仂者らしい勤勉さが身についていた。

このとき久美子さんはどうしても、夫を仕事に出したくはなかった。虫の知らせか、弁当をせかせる重一郎さんの顔にごはんをたべきつはてやりたくなるほどはがいかった。

"バタバタ死によるぞ！"

（出勤してみると雰囲気は異常だった。採炭甲方分会は委員が休んでいたので、以前委員をやり、そのときは代議員だった重一郎さんが中心になって、会社のくりごみを中止させ全員宮浦支部にあつまって支部長から状況説明をうけた。

「三川鉱の八坑八人員は現在判明したところでは千四百名。うち七百名死亡、残り七百名は不明」と知らされた。

「そげんふとか事故がおきとるとかね。三池労組員も死んどるやろう。ヨシッ、みんなで救助にいくぞ！」

顔をみるなり、「執行部はなにしよるか！　はよ行かんと下ではバタバタ死によるぞ」とどなりつけた。村上さんたちの先に立った係員は何回も「ストップ、ストップ」と止めたが、「同志を見殺しにできるか」とおしのけ、おしのけすすんだ。粉炭をひとニギリ手に持って少しずつ落しながら、後から通気が来ていることをたしかめながら前進していった。

目にしみて忘れぬ赤腕章

三川鉱本線坑道に出てみると、復線の車道いっぱいにズラーと人が倒れていた。担架もないので坑木をいっぱいつんだ炭函が二台あったのでそれをみんなで空にして、レールにたおれた人たちをおしのけ、おしのけしながらトンドン奥に入っていった。とにかく息のある人だけを先に助けようということで、二台の炭函に乗せては宮浦連絡坑道まで何回も運んだ。いまでも忘れられないことは、本線に赤い腕章をはめた中央委員が倒れていた。「ああこの人も苦労したのだろうなあ」と思った。腕章の赤さが目について、いまでもはなれない。

途中で、止っている人車にただ一人三本線がほほづえをついて座っていた。

「おっさん、どげんしたつな。はよう起きんな」といって肩をつついてみたら、死んで硬直していた。

無効の検定器でガス検定

三川の三二八昇にまできた。係員は「ここから上は危険だから」といったので、「そうたんいうな。もし人がいたらどうするか。おれがみてくる」というと、係員が「一寸待ってくれ」といって検定器でガスをはかりにいった。五分ぐらいして帰ってきて「ガに二人の人が頭をかさねるように倒れていた。一人は死んでおり、一人は生きていた。その人は三本線だった。その人をかつごうとしたが足がガクガクしてならない。他の人にたのんでやっと下がってくると、本線で入坑してきたばかりの、まだ真白い服をきた、酸素マスクをつけた三川鉱救助隊に出会った。

救護隊は、素面で助けてまわった村上さんたちに、こともあろうに

「奥の方にはガスはなかな？」

ときいた。

村上さんは「それが救護隊のいうことか！」と大声でケンカした。

そのころになると会社の医者も下がってきた。しかし宮浦鉱から風がぐる安全なところでフンソリ返って注射などしていた。

「医者が切羽にまでまわって手当をしていたら、死なずにすんだ人が多かったのに」と村上さんはいう。

真白いタンカで断固運ぶ

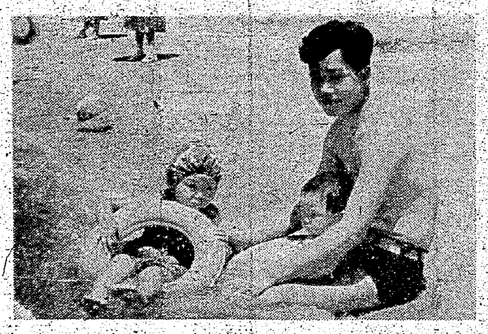
炭函に遺体を入れてドンドン運びはじめた。坑員や新労組員はせまい炭函に五体も六体もつみかさねて送ろうとする。村上さんは最後に残った三本線の遺体三体を炭函に真新しい担架の布をしきつめてきれいに並べた。係員がきて、「担架の布だけはとってくれ」という。村上さんは「手をつけてみろ、足でも腕でも打ち折ってやるぞ！」とドナリつけて指一本ささせずに送りだした。

村上さんと一緒に救助にいった人たちの中からたくさんのＣＯ中毒患者が出た。会社はなかなかＣＯ中毒であることを認めようとさえしなかった。なかには「もう絶対救助にはいかんばい」とか、「もうあんな事故が起これば、家で寝とく」という人もいるが、村上さんは

「炭鉱労仂者は"おれが埋ったときは助けてくれ、お前がたおれたときは助けるぞ"という気持があってはじめて仂けるものだ。あのときも係員は何の役にも立たんし、助けたのは私たちだから」という。

絶対安静とは

一週間ほどして目まい、むかつきがはじまった。勝立分院では「カゼでしょう」と片付けられていたが、作業が再開され入坑した日からワクをみればチラチラと動き、ハコが動けば体がうごくという状態がつづき、とうとう五日目で出勤もできなくなった。大地評病院で「生命が惜しかったらすぐ入院しなさい」といわれ、絶対安静をいいわたされた。はじめてびっくりしたのだった。



写真上は、妻の久美子さんにつき添われて病院通い。下は、元気だったころの素晴らしい体の村上さん。

百八十度変った性格

村上さんの―ある日の日記

きのふの頭つうも大分うすらぎ、少し気分も良くなる。

ＮＨＫの、労災病院のことが放送されるので、七時に下へおりる。見ていると、あらためて事故への腹立たしさをおぼへ、なみだが出る。

ＮＨＫのアナウンサは、事実をかくそうとする。ぼかす。日本全体が何かしら、黒いくもにつつまれているみたい。

いつがはくる、晴れる時か。自分達の手で、子供達の手で。いやみんなの手で。

いつかはくる、必ず必ずうらみはらす時が。

その日まで、その日までがんばらんなら。

正しい道を、たとへ石ころがあろうと、山があろうと。

子供達と一しょに、夫婦力を合わせて。

いつかはくる、真実の日本が。みんなの日をつくる時が。

いろいろ考へて見る。

頭が、頭がゆうこつきかん。クソッと思ふ。

頭が痛い。

いやになる。

御はんがうまくない。少したべる。

ソフトボルに行くも、あしがふらふらする。

きつかった。

久美子（奥さんの名前）達が来る。

高木さん（同僚のＣＯ患者）の奥さんは、あしたから東京に行かれるそうだ。オルグ、御苦労さま。元気で。

久美子達は、月末から座りこみだそうだ。

みんなに苦労かけるなあ。

体だけは大切にする様に。

あんまりむりしない様にと言ふ。

久美子はわらうだけ。すまんと思ふ。

会社に行かれる様になればなあ。

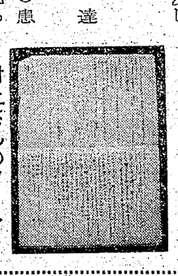
夕方友人と囲ゴ。今日も負げ。残念なり。

なかなか思ふ様にならん。

よるの体おん七度。

あしたもあついことだろう。

（一九六八年六月二十一日）



村上さんのノート

忘れ得ないくやしい思い出

ちょうど昨年の三月のことです。申しあげにくい事情が原因して、ある晩主人がカーッとなって私をひきずり出しながら、『お前のような奴は出てゆけ』とわめき、次には出刃包丁をもち出してきて『おれはもう死んでしまう』とあばれたのです。包丁を取り上げて自殺を思いとどまらせるまでは、すいぶん骨が折れました。そして私にはあくまで出てゆけの一点ばりでしたから、その晩、カーッとなっている主人をいつもの通り睡眠薬をのませて、とにかく寝かしつけたのです。私はあまりのショックに一晩中おきて考えました。ここで十何年つづけてきた生活にピリオドをうつか。それが一番救われはするだろう。だけどいま私がこの家を出ていったら世間はきっと『あの人はご主人がガスボケになったけん見すてらした』としか思わないだろう。それでは自分もつらい。まして三人の子どももいる。どうしたらよかろうかと、結局は子どもたちのためにこの家に残ろうと決心し、翌朝主人に『せめて子どもたちの母親としてこの家におらして下さい』と真剣にたのみました。それでも、主人は『子どもたちのめんどうはおれがみる』といってきかず、どうしても許してくれません。長女も『お父さん、お母さんはどこも悪いところはないやんね。家にいてもらって……』とたのみましたが、そのときのくやしかったことはいまも忘れることができません

首をつろうと

から家にいました。吉田先生も心配して家に来ていただいておりましたところ、その晩おそく大地評評病院から『お宅のご主人がいま救急車で送られてきなさいました』と知せがありました。

おどろいてかけつけてみると、南関の近くでバイクにはねられ運ばれてきたことがわかりました。

あとで聞いた話をまとめてみますと、その日病院に帰るといって家を出た主人はそのまま反対の方向をたどって小岱山の方に歩いていったのです。小岱山にのぼりはじめたときはもう日も暮れかかった頃だったそうです。それからすいぶん登ったところで自殺しようとしたのですね。睡眠剤をのんでこんどは首をつろうと、着ている着物の帯をほどいて枝にかけようとするけど、ひどいＣＯ中毒のためにその動作がよくできず、そのうちにのんだ睡眠薬の作用でふらふらとなったのです。

子どもの呼び声にハッと…

しばらくたつと両の耳に、まるでせみの泣き声のようにわんわんと三人の子どもたちが『おとうちゃーん、おとうちゃーん』といっしんに叫ぶ声が聞えてきたらしいのです。その声にハッと眠りからさめると同時に、『そうだ自分には子どもがいたのだ。生きなければ……』と思い返したというのです。そうしたら一時も早く家に帰りたくなったものですから、あの体でミカンを植えた段々畑をそのままっすぐにとび降りていき、ちょうどそこに荒尾駅行きの市営バスが止まっていました。バスが動き出す方向が荒尾だと思って歩き出したとたんバイクにはねられ